

# 野村 万之丞

## オモガルの時代へ。

「明治の人は、哲学を重く喋ったからオモオモ。二十世紀は、能・狂言といった軽いものを美辞麗句でコケ脅かしをした。これはカルオモだね。二十世紀の末期は、カルカルの時代。そして、二十一世紀こそは本物の時代になるだろうと。だから、重い話題を軽く言う。つまりオモガル。哲学娯楽の時代になると思っているんです」

### 超過去、超未来。

取材の終わり、氏は今を生きるのではなく、過去と未来を生きたいねと言い、三百年、五百年後のコンテンツを未来のためにつくってあげたいと語った。つまり氏が見つめる未来とは十年、二十年先ではなく、そのもつとずっと先。過去もまた遙か昔々へと遡る。時間の目盛りを変え、謎解きを重ねて出会うたいくつもの真実。そこには超現実的なもう一つの力が働いていたようにも思える。その力の正体こそ、仮面という神：かどつかはわからないけれど。

現在、千個近くの仮面をお持ちだとうかがっています。狂言師というお家柄から、

幼い頃より仮面とは特別な関わり方をされてきたのでしょうか。

「能は仮面を使うけれど、狂言は使わないと思われている。それはあくまでも固定概念だね。実際は能では15歳を過ぎるまで仮面をつけず、一方、狂言は3歳時から仮面をつける。能と狂言は兄弟の芸能で、母親のDNAを最も受けている兄、それが狂言なんです。母親は猿楽という、音楽と仮面を使う滑稽な物まね芸で、父親のほうの和歌・曲舞といったシュールな芸能の影響をたくさん受けたのが弟である能なんです。

能は仮面を一つの特徴として、謡と舞と仮面というものをとんとん増幅させていったんだけど、狂言では仮面はワン・オブ・ゼム

顔もあれば、仮面もあるし、音楽もあるという、トータル・シアター＝人間劇として成長していったんだね。私の家、万蔵家には、「猿に始まり狐に終わる」という言葉があつて、(鞍猿)つづば(さる)という狂言の小猿の役で仮面をつけて「トローシ、二十代の釣狐(つりぎつね)で修行を終わるとなされている。だから、僕も2歳半の時に有無を言わず猿の面をかぶらされ、児童福祉法違反で爺さんと一緒に舞台上に出させられた。(笑)そうすると、仮面とつづばあつていくか」といふことを頭で考える前に、まず身体でやっていたということがあると思います。

お爺さまは面打ちでもいらしたそうですね。

「私は直系の長男に生まれましたから、祖父がアトリエでニをぶるい、面を打っている姿を3歳の時からずっと見てたわけ。さらに祖父は趣味で猿楽とか行道面というものを

古美術として扱い、家の中にいろんな仮面を置いたり、飾ったりしてたんだね。で、父親のジエネレーションはというと、新劇・演劇運動にかぶれて、やれシークスピアだ、ラシーヌだ、日本の古き伝統を拒絶して個人主義の演劇に走ってましたから、興味がなかったでしょう。祖父は私にああなうてはいけなと。日本のものをしっかりやれ、仮面を大事に守り、増やし、考察していけと。毎日常屋で衣裳をたたみながら、口癖のように言うてました」

にもかわらず、二十代でヨーロッパに渡られたという事は、

「十代後半からやはり演劇にかぶれましてね。(笑)ナツプザックを背負い、一人ヨーロッパに渡り、そこでめぐり逢ったのがコンスタンティン・スタンブルというイタリア古典仮面劇の復元者なんです。この、一度は滅びた芸能の劇形態をサルトルやソレリなどの芸術家たちが、わずかな資料・絵・仮面の断片から復元しててね。そこで僕はミラノ・ベネツィア、パドヴァといったさまざまな地方の人々の特徴を仮面に写してたというところを知ったわけ。ちょうど仮面を扱う人々のシンボリズムもあつて、世界各地の仮面の多さに驚き、さらに仮面のことをペルソナという、それはつまりパーソナル、個は仮面から始まっているというところ、そして、日本という国がいかに顔の文化であるかというところにシビクを受けましたね。顔というのは表に出て、最も人に認証されるものではあるけれど、顔が出過ぎると心が苦しくなる。だから、顔を隠すことによつて心は開かれると思つた。つまり仮面ほど正直なものはなく、人



【真伎楽(しんぎがく)について】  
伎楽は1500年前、聖徳太子の次代に伝えられ、鎮護国家芸能として寺社などで盛んに上演されたが、平安後期には滅び、現在では伎楽面が正倉院や法隆寺に現存するのみ。まして、伎楽がどんな芸術だったかは知る由もない。仮面研究家でもある氏は、伎楽の今日の再現を志して、10年間に渡り私費を投じ、伎楽面14種23面と衣裳道具を復元。こうして生み出されたのが21世紀の芸術「真伎楽」である。

間の顔ほど嘘つきなものはないと。そして、能面のように無表情、ではなく、多表情であるということがわかってきた。ならば、仮面というものを通して人間の本質を探れないだろうか。そして、日本に帰った僕は、自分の足元にある能・狂言面をあらためて見直し、潰れた古い文化や芸術を活用・再生することをテーマにしていこう、国と国とを結び文化として21世紀の試金石になるようなことをしたいと思つたわけです」

その潰れた古い文化とは、伎楽(ぎがく)であつたわけですね。

「伎楽を日本に誘致したのは聖徳太子で、それに応えてやって来たのが百済の国の味

摩(みま)し」といふ芸術家ですね。「二人が共同作業で今の奈良県に学校の前身である楽戸(がく)をつくって、そこで教育としてやり始めた。だから、今度、静岡で子供たちにやらせようというのも、我々がまだアジアの一員だった頃の超過去ものを、超未来を生きる子供たちに教えてあげたいというのが目的です。そして、伎楽をただ復元するのではなく、その心を見つけたして今日的に復元しよう。こつこつできあがった作品、真伎楽を、さらに僕は哲学娯楽と位置つけた。哲学娯楽とは、正しい娯楽は哲学であり、正しい哲学には娯楽性がなければいけないということ。簡単にいうとオモガクなんです。重い話題を軽く言う。明治の人は、哲学を重く喋つたからオモオモ。20世紀は、能・狂言などの軽いものを美辞麗句をつけて重々しくコテ脅かしをした。これはカルオモだね。そして、20世紀末期は、若者が軽い話題を軽く言つたカルカルの時代。僕は21世紀こそ本物の時代になると思つているので、重い話題を軽く言う。オモガク、つまり哲学娯楽です」

### 見えない本物。

仮面は過去に遡るほど特徴的で、伎楽面などはかなり個性的な顔をしています。なぜだと思えますか？それは仮面は目に見えない神と目に見えない心を繋いだ目に見える最初の物体であり、神そのものだから。神とは超人的なもの。カール・ルイスが走るその身体を見て、人は神だと思つた。人間業ではなく神業だと。したがって神は人間

手に持っているのは、鬼面(こんろん)。クルド人から来ているのだろうといわれている。「耳が尖っているでしょう。これは能面の野干(やかん)にもある。こうした共通項を見つけるのがグローバル化ですね」



【のむらまんのじょう】

総合芸術家。300年の歴史を持つ狂言師野村万蔵家八代目当主。幼少より祖父、父(共に人間国宝)の薫陶を受け、1995年に五世万之丞を襲名。20代初めにイタリアで演劇人類学を学び、ピーター・ブルックらとの出会いを契機に独自の芸術観に目覚める。アジアやヨーロッパの演劇・芸能の研究を続け、現在では企画制作・演出・研究・文筆・役者として活躍。長野パラリンピック冬期大会開会式、ねんりんピック広島開会式等をプロデュース。93年文化庁芸術祭賞、97年織部賞、01年にはフランス政府より芸術文化勲章シュハリエ受賞。NHKドラマ『聖徳太子』、大河ドラマ『利家とまつ』などの芸能監修も務める。著書に『心を映す仮面の世界』『マスクロード 伎楽再現の旅』など。国士館大学アジア学部教授。1959年東京生まれ。

よりも遠くまで見られるから、すごく目が

出てる。よく聞こえるから、耳もカキイ。さらに仮面は、その国の歴史の生き証人でもあるんだね。例えばマハカーラという仮面を見ると、3つの目があって、頭の上にドクロがあり、ハコを出している。3つめの目は真実の

目とじて、その目が開いたときに破壊創造神が真実を見せることや、ドクロはデュルダとじて、身体と死後の世界との媒介者であること、ハコはカーリーとじて、心の中にある悪いものを外に出していることなどを一つの仮面がしゃべり出す。また、仮面は人間が根本に思っていることを最も現してもいい。真伎楽の真は、見えない本物という意味で、心も神も信も見えない本物。どれもシンと読むでしょ。シンという音に本物を見出し、伎楽というたわいない仮面劇を使って、シルクロードを逆流する。それが古くて新しい21世紀の文化の共有に繋がるんじゃないかと。つまり文化交流の時代から、文化共有の時代に向かったということだね」

昨年、東京からスタートした『真伎楽』は、奈良、大宰府、そして、近く韓国にも渡るそうです。

「今回は、プロユーザーとしてマスコロードプロジェクトというものを立ち上げたんです。日本からシルクロードを逆流して、感謝の心を込めてお里帰りをしよう。韓国では景福宮という皇居のような、言ってみれば国民感情が最も強い場所であることにより、教科書問題や参拝問題の方入抜きができればと。さらに北朝鮮まで行って、日本人が韓国人と北朝鮮の人を握手させてあげられれば最高だし。うまくいけば、その凱旋公演

は静岡なんだよね」

『真伎楽』にはストーリーはあるのですか。「ストーリーらしきものはあるけれど、起承転結があるわけではなく、悪魔払いをするとか、神をよぶとか。知恵を教えるんだね。過去を大事にしようとか、おへそを出していると言えまにとられますよとか。そういうことをオムハス形式のようにして見せている。例えばガルトダという鳥とハスキというコブラが戦う。ガルトダには嘴に玉が付いているんだけど、それがなぜなのかわからないけれど、鎌倉時代の楽師狛近真こまのちかざね(という人が、教訓集の中で、迦楼羅(かるら)はケラハミをする」と記している。では、ケラとは何か。ケラとは虫ケラである」と。ならば、なぜ虫ケラを噛んでいるのかとそれを調べてみると迦楼羅とはガルトダのこと、ガルトダはインドの神様ヴィシュヌの乗り物だとわかる。さらにガルトダは地上にいるヴィシュヌに情報をもたらす、すなわち天の支配権を持っている。そして、ヴィシュヌが地上にいるときにはハスキというコブラの上に覆っていて、このコブラが地球を支えている。これが地の神で、つまり地と天の間にヴィシュヌという幸せがあるというわけ。だから、ガルトダが飛んでくるといことは、その後ろに幸せがあるということ。そして、鳥とコブラが戦うということは、天と地が戦うこと。鳥が地球をくわえるということは、和合するということ。このようにストーリーはある。

ただ、それをきちんと解説はしない。見た人の想像力にまかせましよう。チラシも渡しますから、後でそれを読んで、二度楽しんでいただければと思います」



チケット発売中

マスコロードプロジェクト **4/14**

**真伎楽** SHINGIGAKU

昼の部 12:20開場 13:00開演

夕の部 16:20開場 17:00開演

グランシップ大ホール・海

全席指定 S席 3,000円(学生 2,000円)

(税込) A席 2,000円(学生 1,500円)

B席 1,000円(学生 700円)

\*チケット購入者を対象に野村万之丞氏による特別講演会(無料)を3/26(火)に開催。(詳しくはP19参照)

21世紀はユニテッド・ステイツ・オブ・アジア=USAとアメリカUSAの時代であるという。「そして、アジアというグローバルな上に、日本というローカルを乗っける。これをグローバルと言ってるんだけど、これにびったりはまるのが伎楽であり、仮面だったわけです」